

## 幕末維新における新朱王学の展開 (IV)

— 並木栗水及び楠本碩水・東沢瀉の史的地位 —

望月 高明

あらし 本稿では前号に引き続いて、楠本碩水の生、わけても梅林山荘後のそれについて述べる。明治十五年、碩水は兄端山等とともに鳳鳴書院を創建している。同書院が民間の有志が拠出して設立し、更に特色ある人士が自ら身に付けた学徳をもって授徒講学したこと、また、官立の学校とは異なつて、必ずしも官吏養成の準備教育を目的としない教育が目指されたことは、やはり注目しなければならない。そして、かかる傾向こそ宋代に興つた書院教育の理念に他ならない。碩水は書院設立の経緯と趣旨を記した「鳳鳴書院記」を撰しているが、それは朱子の「白鹿洞書院揭示」の精神を現代に生かそうと意図したものに他ならない。なお、同書院は明治十九年にその史的使命を終えて閉鎖されたが、それが宋以来連綿と相承せられてきた「斯文一綫の命脈」が「今一此処」でぶつりと大きな音を立てて断絶したという象徴的な出来事であることを論じた。また、碩水は自己の「棄祿」という行為について、散文の形では断片的にしかその消息を語っていないが、韻文の形では折りに触れてその秘義を告白している。そして、碩水の詩に頻出する「迂愚」「迂疏」「疏頑」等の表現は、彼の生が系譜的に「拙者」の系譜に属することを指摘した。また、碩水には兄端山の渾然たる気象に比べると、かなり強い偏癖があった。それは直接にはひとまず負のそれである。しかし、同時にそれが碩水における原理的なるものを堅持するために長所として作用していることを論じた。

## 五

『碩水先生日記』によれば、碩水は明治六年十月、広田に住き寓居している。碩水の高弟の岡直養は、「按ずるに、開塾なり」と注を付している。それは近村の父老が広田に校舎を建てて碩水を主席講官として招聘したのに応じたものである。『碩水先生言行雜記』に「近村の父老相謀り、校舎を広田に創め、先生に請うて其の講席に主たらしむ。先生往来して以て之を教督す。大率十日広田に在り、十日梅林に在り。何くも亡くして亦た廢す」とあるのによると、碩水は十日間ごとに梅林と広田とを往来して、それぞれの地で塾生を教授するという生活をしばらく続けたらしい。

孜孜として覚えず鬢霜侵す、復た青衿の爲めに誤つて林を出ず。推して以て人に及ばすを恕道と知る、独り惟だ己を善くするのみを豈に仁心ならんや。起居趣を殊にし塵累を超ゆ、風色改観し醉吟に適す。語を寄す鍼洲の諸学友に、江流一葦屢々来たり尋ぬ。(『碩水遺書』一、広田寓居寄諸友人)

上の詩は表題からも明らかなく、広田の寓居から「鍼洲の諸学友」、すなわち針尾の梅林塾生に示した詩である。碩水はS-II書簡で「尤此度ハ容易ニ山ヲ出テ候心得ニ無御座候。尋常一様芭蕉雨、聽至今宵別自清」之句ヲ得申候」と述べて、その決意の程と心境を披瀝している。そして、事実首聯の第一句は、その決意に違わず梅林山荘に在って読書と

講学に精進している自己を詠じたものであろう。しかるに、碩水は近村の父老たちの請を容れて自らその誓いを破った。第二句でその理由を「復た青衿(学生のこと)の爲めに誤つて林を出ず」と表現しているのは、いかにもおもしろい。もつとも、この句を取り来たつておもしろいなどと評するのは、不謹慎の誇りを免れないもので、本当はこのわずか七文字に碩水のどれほど厳肅な思念が込められているかを理解しないものといわねばならない。このことは例えば碩水の草庵宛の次の書簡を読んだなら、直ちに判然とするであろう。

此時ニ当リ愈以正学講明不可怠事ニ奉存候。正学之盛衰ハ一国之命脈ニ懸リ、中々小事ニ而無御座候。吾人今日ニ相当リ、此外心ヲ尽シ候処無御座候。(『朱子書』一九七頁)

時勢愈以切迫、長防戦端相開ケ最早太平之期も無之、御同様浩嘆之至ニ奉存候。乍然吾人今日何国ニ罷在候とも、講学之一事ハ忘却仕候而ハ不相成義と相心得、随処勉勵罷在候。(同上、二一八頁)

もつとも、上の二つの文は前者は碩水三十五歳、後者は三十六歳と、彼がいまだ平戸藩に在つたころのもので、直接には退隠後に成つたものではない。そこには、幕末という国史上かつてなかつたような国歩艱難に遭遇して、家国の運命、生民の安危をわが心性に会帰し、心性の学の盛衰をもつて一国の命脈に関わる一大事と考え、心性の学を講ずることをわが使命とする重大な決意が語られている。そして、碩水のこの決意は、退隠後においても変わることなく相続せられたのであつた(碩水が明治以後においても依然として朱子学者であり続けた理由の一斑がここに存する)。彼が一旦は「此度ハ容易ニ山ヲ出テ候心得ニ無御座候」と自ら誓つたにもかかわらず、再び「誤つて林を出」たのも、心性の学を講ずるといふわが使命に忠実であらうとしたからに他ならない。かくて、「復た青衿の爲めに誤つて林を出ず」という表現は、かかる脈絡の中に定位したとき初めてその厳肅な意味を開顕する。この簡潔な表現には、碩水の切実な内的衝動に基づいた已むに已まれぬ伝導の熱情とともに、読書人としての責任意識とが読み取れるであろう。(もつとも、かく言つたからといって、碩水の伝道を、例えば齢八十に余りながらもなお東奔

西走して道を伝えて止まなかつた王門の王竜谿の伝道者的な熱情に直ちに比擬しようというのでは固りない。後述するように、自己の姓名を国史隠逸伝に列することを希望した碩水と、「師門の罪人」たらんことを恐れ、「師門の一脈」をして絶えざらしめんとした竜谿との間には、同じく伝導者的な熱情といつても、そこには自ずと濃淡の差があつたことは認めなければならぬ。

碩水は碩水が自ら林下の高士として高踏的な生を選び取りながら、それにもかかわらず何故門生を集めて授徒講学するのかという動機に触れている。碩水の第二句「独り惟だ己を善くするのみ」の出典にもなつている、「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」(『孟子』尽心上)、あるいは「天下に道有れば則ち見われ、道無ければ則ち隠る」(『論語』泰伯)、「之を用うれば則ち行い、之を舍つれば則ち蔵る」(述而)という表現は、ともに同じ事態を語っている。その同じ事態とは、時処位に應じて行蔵自在な柔軟な処世態度を取るべきこと、これである。その他、「邦に道有れば……邦に道無ければ、天下道有れば……天下道無ければ、治には……乱には……」という風な言い方は、儒教の經典には極めて多い表現であつて、同様に時処位に應じて時宜になつた処世の態度を取るべきことを説いている。ところで、針尾での碩水の境遇はといえば、「窮」ではあつても「達」などでは断じてない。従つて、上述の儒教的な人間論よりすれば、碩水は「独り其の身を善くす」る、すなわち門生を取つて教授するなどという骨の折れる面倒なことに関与せず、その独善孤高主義・退蔵韜晦の道をどこまでも貫徹してよいはずである。例えば、その貴生の立場から「己を知る莫くんば、斯ち己まんのみ」と断然と言ひ放つて、孔子をして「果なるかな」(『論語』憲問)と言わしめた(なお、朱子は「果なるかなは、其の世を忘るるに果なるを歎ぜしなり」(『論語集注』七)と解する)、あの人間の国の異邦人、隠逸者たちのように。なるほど碩水の処世態度は、この点においては著しく道家的な独善孤高主義に接近してくる。けれども、隠逸閑居はそのままに、いわば即自的に肯定されているのではない。かえつて毫釐千里なればこそ、一毫の離間はけつきよく千里もの離間を結

果するともいえる。そして、その根底に脈々とはたらいっているものこそ、人相ともに生育される温かい仁愛の精神に他ならない。これ碩水が「推して以て人に及ぼすを想道と知る、独り惟だ己を善くするのみを豈に仁心ならんや」という所以である。

碩水は明治十二年四月、爾来八年間住み慣れた梅林から居を江下村に移した。これ「昨は住む水の北村、今は来たる水の南里。南北一溪隔つ、終始水を離れず」、「昨は住む松岳の下、今は来たる松岳の前。松岳離ること得ず、是れ宿因縁なること莫からんや」(『碩水遺書』二、移居二首)とその感慨を詠ずる所以である。この移居は伯父(父養斎の兄嘉一兵衛、出でて鴨川姓を冒す)鴨川氏の後が絶えたので、碩水に鴨川家の先祖の祭祀を執り行う責が生じたことに因む。S書簡に「其後先伯父ノ後ヲ承クベキ議起リ、再三辭避スレトモ弟ヨリ外ニ嗣クベキモノナキヲ以テ許サレズ。不得已シテ其祭ヲ奉シ田園地価千七百円分配ニ与リ、今日ハ先ツ不自由と申訳ニモ無御坐候」というのは、このことを指す。

明治十四年、碩水は兄の端山、近藤信卿(端山・蒙斎門人)、浜本必強(碩水門人)等と謀り、鳳鳴書院の設立を計画する。書院は翌十五年に完成した。ここで少しく端山の履歴について触れると、彼は二十四歳のとき、江戸の佐藤一斎の門に遊学し、特に一斎の高足の秋陽及び訥庵の学に心を動かされたことを告白している。帰国後は国学教員に補せられ、経筵侍講を兼ねる。幕末維新という未曾有の激しい変動と波瀾の時期には藩主を輔佐して王事に勤めるとともに、藩政の改革、人心の安定に努め、大いに治績をあげた。『端山自著年譜』によると、明治二年十一月、平戸藩権少参事、次いで権大参事に昇任する。明治四年七月、廃藩置県の命が下った後もなお旧平戸県の事務を管掌する。翌五年三月、長崎県九等出仕に任ぜられる。翌六年一月、同職を免ぜられる。これより以後、端山は仕途に意を絶つて、家に在つて子弟に教授することに意を注いだ。端山の草庵宛の次の書簡は、その内容から退隠後数年を経た明治九年ごろの家居教授時代のものである。その内容は直ちに碩水の「塾規」(殊に第二条)の精神を髣髴させるであろう。

因テ後覚ニハ書生教導上、別テ嚴正、投時好候書籍一切嚴禁、依旧孔

孟程朱之正脈の講習罷在候。書生之来不來は但々任シ、世味一切抛却仕候。因テ挙業学之者一人も参不申候。且私塾杯ニテ免許ヲ乞杯之事一切不仕、吾道ヲ学フハ、如於衣食。豈官之許可ヲ得テ衣食之理アラヤト断然相極メ、若官ヨリ相禁候ハ、其義ヲ以書生ニ命シ、書生矢張依然来学仕候ハ、致方無之共、飲食致シ候心得ニテ講習迄相心得申し候。(『朱子書』七三頁)

端山はこの文の前で「天下之形勢逐日所謂開化ナトノ新説流行ニテ紀綱類廢、吾聖賢之道掃地之勢ニ馴致シ、如何トモ難致仰天烏々仕候外無之」と述べて、自己の奉ずる聖賢の学が新時代の異質的な思想と遭遇して、その前に有効性・妥当性を失つて空疎と化しつつある状況をかこつてい。しかしそれにもかかわらず、時好に投ずるような書籍は一切排して、依然として孔孟程朱の正脈のみを講習するという言には、端山と碩水とを貫いて脈々として相承せられている伝道の熱情、使命感のというものを読み取ることができよう。次いで、端山は明治十四年四月には平戸の邸を引き払い、居を彼杵郡針尾島端山(葉山)の旧里に移した。こうして、鳳鳴書院は端山・碩水兄弟とその門人の幾人かを陣容として発足した(なお、藤村『楠本碩水傳』二二二頁〜三頁に、端山が病床に在りながら記した鳳鳴書院の構想の覚書(「新築書院に付」)が載っているのを参照)。なお、同書院設立の拠出者は上記四名の外、書院設立の趣旨に賛同した旧藩主松浦詮公及び諸同志数十人に及んだ。このように、鳳鳴書院が民間の有志が拠出して設立し、更には徳望高き特色ある人士が自ら身につけた学徳をもって徒を集め業を授けたことは、やはり注目しなければならぬ。すなわちそこには国都・州県の官学と違って、必ずしも官吏養成の準備教育を目的としない教育が目指された。そして、実はかかる傾向こそ、宋代に興つた書院教育の理念に触れるものであった。碩水は「鳳鳴書院記」(『碩水遺書』六)を撰して、書院設立の経緯とその趣旨とに言及している。その中で碩水は、「今や世は聖明なる天子が上に在つて、天下は文明、上は大学から下は村里の学校に至るまで、教育制度が限なく整備された今日、かくも一の小書院に心を掛けるのは、已むを得ない事情があるのだろうか」との問いを立てて、それにこ

う答えている。

いかにも已むを得ない事情があるのだ。昔の士大夫たる者は、幼年にして学び、壮年にしてその学んだところを政治面に実行し、老年にして職を辞すると、郷里に退隠して孝悌忠信・礼義廉恥の道をば、郷党の子弟に教えた。いわゆる党庠州序というのがそれである。それ故学問と政治とは必ず一途に出でて、教化は成り、風俗は純美であった。ところが、後世になると学問はその方途を失って、人々は虚文に馳せ実践を忘れて、ただ科名利禄のみを貪って、その勢はもはや回復不能なところまで来ている。その結果、人材は破壊され、道徳は頹廢してしまった。以上が（朱子によって）白鹿洞書院が再興された背景であり、宋明以来、書院学が命脈を保っている所以である。

碩水がここで白鹿洞書院に言及しているのは、固より偶然ではない。『文献通考』に従えば、宋初、廬山の白鹿洞書院、睢陽の応天書院、潭州の嶽麓書院、衡州の石鼓書院天下に名高く、府州学の設置に先立って教育の実績をあげていることを記している。四大書院中、設立の最も古いのは白鹿洞書院であり、唐の李渤（字は潜之）が科擧に従事せず、隠棲して書を読んだ故趾に建てられた。白鹿洞書院はその後幾たびか変遷を経るのであるが、ここでは南渡後、朱子が南江軍（江西省）の知事として、故趾に依り書院を重建復興したことのみ摘挙しておく。碩水は上の文に続けて、更に次のように述べている。

且つ夫れ書院の教は、既に制規の妨無し。其の業又た考試の害無し。其の心優柔厭厭、以て深造自得の域に入るべし。是を以て士の墳策を抱き、寛間の地に退居し、先王の道を歌詠して、以て其の徳を蓄え、以て其の用を致さんと欲する者は、咸な書院に就くことを樂しまざるは莫し。是れによりて之を觀れば、惟だに士の徳業を成す必ず此に於てするのみに非ず、国家の賢才を得るも、亦た彼に優れり。

碩水のこの文を注意深く読む者は、それが朱子の教育観を端的に示す「白鹿洞書院揭示」（『朱子文集』七十四、なお、その後「白鹿洞学規」）「白鹿洞規」というのも同じ）の跋文に盛られた精神をしつかと踏まえたものであることを首肯するであろう。山崎闇斎はその「白鹿洞学規集

註序」（『垂加草』十）において、朱子のこの「揭示」は「小学」「大学」の書と並び行われるに足る明晰な組織を備えているにもかかわらず、『朱子文集』の中に埋もれてしまつて、その深淵的な含蓄を開顕する者がいなかった。それに続けて、自分がかつてこの文を表出して書斎に掲げ、心を潜めて玩索した。近ごろ李退溪の『自省録』を読むとこの文を詳論して、かくてこの学規の学規たる所以を知つたと述べている（なお、『自省録』には「白鹿洞書院揭示」について主題的に言及したものととして、『答黄仲挙景良論白鹿洞規集解」及び「重答黄仲挙」の二書を収録する）。このように、朱子の「白鹿洞書院揭示」の精神は、わが国では李退溪にインスパイヤせられた崎門学派によって開顕せられたのであるが、今はその跋文に盛られた精神に深い注目を払われた楠本正継博士の言葉を引用するとしよう。

この文によれば、同書院で教へる所が、決して規矩・禁防の具を他人から設けられて、わづかに持循まもりにたもつするやうなものでなく、従つて、学規などといふやうなやかましい学校の規律を必要とはしない。ただ理の当然と必然とを示せばそれでよいとして、古くから慣例となつてゐた学規といふ文字の使用を注意深く避けた。そこには何か珍らしい為し難いことをするのでなく、難行苦行をするのではなく、生れのまま、人間性に帰ることを示すだけだといふ自負が見える。これは宋学の考へた教育の本質であつて明学に於ても同様だと云へよう。宋明の学者達は力を極めて此立場を主張した。（『中国哲学研究』所収「宋明思想家の考へた教育の本質」）

なお、「鳳鳴書院記」が成つたのは、その末尾に「明治癸未啓蟄前六日」と年次が記してあるのによれば、その成立は明治十六年二月末日ごろと思われる。そして、端山の死は同年の三月十八日であるから、同記は文字通り端山の死の直前に成つたわけである。端山は同書院において孔孟程朱の聖学―純乎たる聖賢の学を講じ、真の人間教育を実践して余生を樂しもうと大きな期待を寄せていたのであるが、創建後一年余りで不帰の客となつた。藤村氏がその『楠本碩水傳』において指摘しているように、碩水の同記執筆の背景には、端山の存命中に、同書院が端山の

力によって創建されたものであることを明記した書院記を作つて、端山の功績を長く後世に不朽ならしめ、もつて端山の意を慰めよとの温情が主要な動機をなしていたことは疑いない。なお、碩水はその後も改定を怠らず、端山の没後、講友沢瀉に「端山先生楠本伯子墓碑」(『碩水遺書』七、碩水はこの文を骨を折つて書いたと自ら告白しているだけあつて、非常な力作である)とともに、「鳳鳴書院記」の斧正を依頼して最善を尽くしている。因みに、鳳鳴書院は復原を望む声が強く、残された写真や資料を基に昭和五十年十月、端山の旧宅敷地内に再建された。

明治十五年三月、葉山左内が旧藩主松浦詮公の命を奉じて来訪、猶興書院での教授を請招する。四月八日、猶興書院の教授を受諾する。なお、猶興書院は旧藩主が旧平戸藩士の子弟の教育に深く思いを致して、明治十三年九月に設立した私立学校で、設立準備には端山が主席講官としてその衝に当たつた。なお、端山は碩水が教授を引受けた翌五月、病のため猶興書院を辞職した。同書院は明治二十年四月の学制改革によって私立尋常中学猶興館と改称し、同三十三年県に移管せられてから県立中学猶興館となり、終戦後は猶興館高等学校となつて今日に及んでいる。

ところで、碩水が猶興書院の教授を引受けた明治十五年四月といえ、上来見来たつたごとく鳳鳴書院の設立が並行して準備せられた時期と重なる(藤村氏は上記の書の中で、鳳鳴書院の完成を明治十五年八月と推定している)。この間の消息については、碩水の沢瀉宛の次の書簡が委細を尽くしている。

弟当夏来旧藩主より依頼有之。不得已事平戸え出張、猶興書院教授請持申候。此度当村二於テ家兄并門人等申請、鳳鳴書院新立仕候処、猶興と合併同一之体二相成、書生も相互ニ往来仕候。猶興ハ旧藩主設立之私学校ニ而、当時公子三名東京より来学、其他旧家中之子弟教育之為メニ而、全ク聖賢之正学端守ニ御座候。時学ハ聊も相用不申。尤旅生も自由入校相許し申候。鳳鳴ハ庭ニ梧桐ヲ植へ候間、此名ヲ命シ申候。豈敢謂鳳鳴於朝陽乎哉。(中略)弟平戸え一年半分余ハ出浮可申、従行之子弟輩往来之船賃并ニ於平戸旅寓等ハ旧藩主より相弁し呉候間、格別之不都合も無之、且猶興之寄宿も勝手ニ御座候。(『朱子書』二三

## 六頁)

「不得已事平戸え出張」という表現は、猶興書院教授の受諾が碩水の本意ではなかつたことを窺わせる。それにもかかわらず、碩水が教授就任を受諾したのには、端山が病を得たためその代役として碩水に白羽の矢が立ったこと、旧藩主の書院設立の趣旨に積極的に反対する理由がないこと(碩水は平戸藩の贅職に在つたころ、藩主松浦詮公が前藩主静山公の緒業を継いで、専ら士氣を励まして風俗を正すことを先務とし、人材の育成に心を砕くなど、藩の文教政策に力を尽くしているのを賛美している)「送泥合子敬序」(『碩水余稿』)、また父祖以来、藩主の扶持に頼つて生きてきた恩義に容易に背きがたいという、いくつかの理由が考えられるであろう。猶興書院と鳳鳴書院は設立時期が余り違わないこと、また、端山や碩水のように両書院の教授を併任する人もいることもあつて、新設の鳳鳴書院は猶興書院と「合併同一之体」、すなわち本校と分校、もしくは同系列の姉妹校のごとき観を呈して、書生は両書院の間(平戸と針尾の間)を往来して自由に聴講することができた。なお、猶興書院が旧藩主設立の私学校であることは、既に述べた。ここで注目すべきは、猶興書院の教育内容が「全ク聖賢之正学端守」「時学ハ聊も相用」いていないことである。この表現は、曩に端山が草庵宛の書簡で私塾における講学の基本理念を述べて、「因テ後覚ニハ書生教導上別テ厳正、投時好候書籍一切嚴禁、依旧孔孟程朱之正脈耳講習罷在候」といつているのと厳しく応じている。

かくて、碩水は明治十五年四月晦日、初めて猶興書院に至り、『春秋胡氏伝』を講じている。『春秋胡氏伝』三十卷は、宋代の思想家胡安国の畢生の著作。同書は綱紀の頹廢と外敵の侵入という国家的危機に際して、道義名節の国家主義の氣運が高まった宋代に、『春秋』の名分主義が、特に君臣の分と華夷の弁として強調的に解釈されるという時潮に棹さして成つた(西順藏氏「宋代の士、その思想史」(筑摩書房『世界の歴史』6所収)参照)。碩水がこの書に深い関心を寄せたのも、彼の名分説に由来しているところが大きい。なお、私は本邦において『春秋胡氏伝』がこれまでにいかなる読者を得たか詳らかにしないが、恐らく碩水などはこ

の書に対するわが国屈指の理解者といえるのではないだろうか。あるいは同書を主語にしていえば、『春秋胡氏伝』は日本において一知己を得たといえるであろう。碩水に「読春秋胡氏伝」(『碩水遺書』六)がある。

なお、碩水は翌明治十六年三月、猶興書院教授の職を辞している。これはその一ヶ月前に兄端山の死に遭遇して、鳳鳴書院の経営が碩水の肩にずしりとのしかかったためであろう。碩水は「鳳鳴書院記」の末尾で、書院経営に直接関わっている端山・信卿・必強、更にはその他書院設立に拠出した諸同志を称揚した後、一転して控え目に自分のことに説き及んでいる。すなわち、

而るに予や浅学、訓詁は以て偏く究むるに足らず、諸注考拠は以て博く証するに足らず、百家詞章は達せず、史学通ぜず、覲然として日に皋皮の上に坐す。其の自ら量らざること甚だし。然りと雖も篤く正学を信じ、高尚にして自ら守り、斯文一綫の命脈をして天壤の間に墜ちざらしめんと欲する所以の者は、是れ亦た後学の得て已むべからざる所なり。

ここには、意外にも自己の浅学であること——自己が読書人として必須であるべき儒教經典的な教養能力の保持者たるに足りないこと、自己が書生を教導する任に堪えないことが率直に告白せられている。そして、ひとまず自己に対する負の評価、自己貶下でそれはある。しかし、われわれは「然りと雖も……」以下の逆接的な言表のうち、碩水の心を深く把らえている喫緊な問題とともに、彼の書院教育に込めた静かな熱情とを読み取ることができるであろう。碩水は「鳳鳴書院記」の中で、「是れに由りて之を觀れば、惟だに士の徳業を成すのみ必ず此に於てするのみに非ず、国家の賢才を得るも、亦た彼に優れり」(前出)と述べて、鳳鳴書院が道徳・学問を基礎とする人間形成の場たるに止どまらないで、更には国家有為の人材を供給する場であるという期待を込めている。そして、碩水のその言に違わず、鳳鳴書院からは岡直養・貞方士精……等々の幾多の俊秀を輩出したのであった。もつとも、このことは彼等が国家の重要なポスト、高位顯職に就いて時めいたということを直ちに意味しない。むしろ、彼等の多くは微職に甘んじ、あるいは民間に屏息してそ

の地域において己が分を精一杯尽くした人たちであった。

鳳鳴書院は明治十五年の開塾以来、翌十六年には入門者数四十一名、十七年には三十九名と最盛期を迎えたが、二十年以後は入門者数も激減した。かくて、明治二十九年二月、その歴史的使命を終えて、遂に閉鎖・解体の止むなきに至った。このことは、単に僻邑の一小書院の閉鎖というに止どまらないで、心ある人たちから見れば、それは宋以来連綿と相承せられてきた「斯文一綫の命脈」が、「今—此処」でぶつりと大きな音を立てて断絶してしまったということの具体的な形象化という、象徴的な出来事であった。そして、かく解さなければ、一時「鳳鳴書院を改めて松南館と名づけ、以て尋常小学補習科教授所とな」(士精の碩水宛書簡(藤村『楠本碩水先生傳』所引)す議が起った時、士精が碩水に「当今学校の設あるに關はらず、私に書院を建て以て子弟を導くは、全く一縷の命脈を天地の間に存するに在り」と、宛ら戈を操って室に入る手段をもって迫った意義は到底理解しがたい(なお、士精の「一縷の命脈を天地の間に存する」という表現は、碩水の「鳳鳴書院記」中の「斯文一綫の命脈をして天壤の間に墜ちざらしめんと欲する所以の者」という表現を踏まえたものである。「斯文一綫の命脈」については、後に改めて主題的に論ずる)。

以上、梅林山莊後の針尾島における碩水の生について、引き続き主として講字という碩水と門生との共同という象面に焦点をあてて論じた。われわれは碩水の後半生の履歴に関しては、ひとまず以上をもって叙述を打ち切ろうと思う。上来やや丹念に叙述し来たったごとく、碩水の前半生は、幕末から維新にかけての時代が既にそうであったように、彼もまた平戸藩士として振幅の大きい変化・曲折に富んだものであった。それに比すると、明治時代(正確には明治三年)を画期として退隱した針尾島での後半生は、内面的にはともかく、外面的にはさして人目を惹く眺めのない、起伏に乏しい平坦なものであった。

ところで、上来の叙述では、碩水の棄禄という行為を把らえ来たって、これを「決断」という象面から解析して、彼の「名分説」に説き及んだのであるが、それはいまだ楯の半面の事実を説いたに止どまる。従って、

以下の叙述ではこの問題について、他の半面の事実の解明を試みるとうよう。上来、明治三年閏十月、大学少博士の職を免ぜられて帰国した碩水が役職及び家禄を「擲棄」したことは、有藩以来未曾有の出来事であり、人々には暴挙とも、あるいは快挙とも映って、毀誉褒貶こもごも入り交じつて分物議をかもしたことについては、既に述べた。「碩水先生言行雜記」はその後に続けて、その消息を「後に人有りて之を問えば、則ち笑つて答えず。妻子と雖も終に其の意を知ること莫し」と言っている。これによれば、碩水の棄禄という行為は彼の人生の秘義に属する底のものといえるかも知れない。次の碩水の言が、直接その時の心境を吐露したものであるか否かは判然としないが、恐らくその時の碩水の心境とは、いかにもさもあつたであらう。

論語に曰く、「人知らずして愠ら<sup>か</sup>ず」と。易に曰く、「是とせられずして悶ゆる無し」と。既に「人知らず」と曰えば、則ち兄弟知らず、妻子知らず、鄰里郷党も亦た知らざるなり。既に「是とせられず」と曰えば、則ち兄弟・妻子・鄰里郷党も亦た以て是と為さず、而も愠ら<sup>か</sup>ず悶ゆる無し。君子に非ずして何ぞや。〔碩水遺書〕九)

このように、碩水の人生の秘義に属する底のものを無造作に取り扱つて、その意味を矮小化して理解することは蔽に慎まなくてはならない。もつとも、「古人豈に天下国家に志し無からんや。而して隠居讀書を以て終身の楽と為す者は、其れ必ず説有り」(同九)というのも、紛れもなく碩水自身の言葉である。ここにおいても隠居閑居はそのままに、いわば即自的に肯定されているのではない。この文の主語は直接には古人であるが、それは直ちに碩水自身に取つて換わる底のものでなくてはならない。何となれば、天下国家・社会人倫への関心<sup>〓</sup>経世済民は、儒家思想を特徴づける本質的要素をなしているから。従つて、碩水を主語にして、「碩水が、天下国家に志を持っていないなどどうしていえよう。それにもかかわらず、碩水が隠居して讀書することを終身の楽しみとなしたのには、必ず事情があるはず」として、その理由を究明することは当然許されてよい。また、

隠遁して世を去るは、人の欲する所に非ず。而して伶人賤工、一たび

楽の正しからざるを知らば、則ち皆な散じて四方に之き、窮困餓死するも顧みざるなり。学者志無ければ則ち已む。苟も志有りて、伶人賤工にも若かざるは、恥ずべきの甚しきに非ずや。(同九)

というのも碩水の言。ここにはつきりと、隠遁して世俗に背くことは、本来士人の欲するところではないことが主張せられている。なお、「伶人賤工一たび楽の正しからざるを知らば……」は、『論語』微子篇の文を踏まえたものだと思われる。上述のごとく、藩の役職及び家禄を辞退した理由を後に人が尋ねても、碩水は笑つて答えなかった。また、常に碩水の身辺に在つた妻子でさえも、ついに碩水の意図は窺い知ることができなかつた。このように、碩水はこの行為について容易に人に語ろうとはしなかつた。まして、碩水は散文としてまとまつた形ではこの問題について主題的に言及したものは残していない。それは「一昨年三月復姓以後、常禄ハ指出居候処、当閏十月、新知被下候得共、不任心底、筋有之候ニ付、直ニ返上仕、格禄共ニ指出、只今ニ而ハ全然タル処士之身分ト相成」(『朱子書』一八四頁)、「予ハ禄ヲ棄テタノゾ。世ノ奉還シタトハ違フゾ。……コノ棄ノ字が大事ゾ」(『過庭余聞』)というごとく、そのことに言及はしていても、それらはほとんど断片的な記述に止どまつている。しかるに、一たび碩水の詩に目を転ずるとどうであらう。われわれはしばしば次のごとき同基調の表現を目撃するであらう。すなわち、

素好時と背き、窮山に遺経を抱く。遺経名教を垂れ、千古典刑を仰ぐ。力学前哲を希い、聊か以て余齡を保つ。貧賤は乃ち分のみ、心靈を累するに足らず。(『碩水遺書』二、山居)

迂愚世間と宜しからず、名利是非何の知る所ぞ。淡泊の心溪水の潔きに同じく、優游の意嶺雲と共に遅し。(中略) 這の裏由来幽趣足り、泉石に従りて生涯を了らんと欲す。(同二、秋日偶成)

迂疏世に適し難く、戸を閉じ塵諱を避く。(中略) 尽日他事無く、間に耽り家を出でず。(同三、閑居)

悠悠として年月過ぎ、旧に依りて疏頑を守る。(中略) 雲忙しくも心鏡わず、水急にして意終に間なり。造化余地を存し、吾に出世の竇を許す。(同三、偶作)

上にあげた四つの詩篇は、それぞれ少しずつ表現を異にしながら、ともに同じ一つの事態を指している。その同じ一つの事態とは、自己の「例外者」としての自覚、これである。碩水は詩中で頻りに「迂愚」「迂疏」「疏頑」……等の語を用いているが、これらの語はそれ自体はある価値的なものの欠如の状態を表す表現として、消極的に望ましがらざるもの、反価値的なものを表す否定的な言辞に他ならない。

それでは、誰か碩水以外の第三者が、彼のことを価値剝奪的な意味を込めて然く言っているのだろうか。それはそうではない。碩水が自身をそのように規定しているのである。ところで、碩水が自ら然くいうように「迂愚」「迂疏」「疏頑」であったか否かは、碩水の前半生の履歴に徴すれば、そのことは事実それ自身がある程度まで明らかにする。しかし、そのことは大した問題ではない。大事なのは碩水が自身をそのような者と観じて、然く規定していることである。このことは、碩水の生が系譜的に拙者の系譜に属するものであることを示唆している。上来述べたごとく、「迂愚」「迂疏」「疏頑」等の表現は、誰か第三者が価値剝奪的な意味を込めて碩水のことを然く言ったものではなくて、飽くまで碩水自身が自らを然く規定したものに他ならない。この区別は重要である。何故なら、その規定はもはや前者の場合のように外から碩水を襲うものとしてではなく、内から碩水が自分自身の意志で選び取ったものとして規定されるから。従って、上の「迂愚」「迂疏」「疏頑」という、それ自体はある価値的なものの欠如の状態として消極的に望ましがらざるもの、反価値的なものを表す否定的な言辞が、かかる消極性を脱して、翻って積極的な価値へと転せられて、巧者の才能手段をもってしてはそれと示すことのできない一層高次の価値を表現する理念にまで昇華されて、自己の牢固とした自負とも信念とも観ぜられるに至る。そして、「旧に依りて疏頑を守る」、「旧に依りて吾が愚を守る」(同四、戊申歳晩作)、「陋巷其の貞を守る」(述懐)等の表現は、端的にこのことを語っている。

私はすぐ上で、碩水の生が系譜的には拙者として拙の自覚に生きた思想家の系譜に属するものであることを示唆しているといった。ところで、自己の生の「拙」なることを吐露した宋人がいる。すなわち、周濂溪そ

の人である。濂溪の遺文に「拙賦」という小文がある。そして、己の拙なることについての喜悦の情、その安らかさを賦したのがこの短い一篇である。(なお、濂溪の「拙賦」については、かつて別の小論において主題的に論じたので、ここでは繰り返さない)。碩水の「七夕」と題する詩に、「平生濂溪の賦を学ばんと欲するも、枉げて上る人間乞巧楼」(『碩水遺書』一)という表現が見える。謂う所の「濂溪の賦」とは、「拙賦」のことを指す。このことは、上掲の詩が栗水宛の書簡に示されている、「コレハ周濂溪拙賦ヲサス」(『朱子書』一三一頁)という碩水のコメントが加えられていることから明らかである。このように、碩水は「平生濂溪の賦を学ばんと欲す」と言っているけれど、実際に『碩水遺書』『碩水余稿』、その他の遺文に徴しても、碩水が濂溪の「拙賦」に直接言及しているものはこの他には見出し難い。とはいえ、「平生濂溪の賦を学ばんと欲す」と自ら公言している人が、「拙賦」の精神を何がしか自分自身に対して要求しないなどということは、恐らく考えがたいであろう。この表現は碩水の遺文を通してただ一回(?)しか現れていないが、固より偶然に発せられたものではない。それは碩水の後半生の生を考えるとする者にとっては、わけても注目に値する表現だといわなければならぬ。何故なら、「拙賦」の精神は文字によって表現せられるものである以前に、何よりも日用実地の場において行じられるもの、行為を通して実現せられるものでなくてはならないから。かく見来たれば、「平生濂溪の賦を学ばんと欲す」と言いながら、碩水の遺文に「拙賦」に言及したものがほとんど見出し難いのも、もはや不思議はない。「拙賦」の精神は、碩水の針尾島での日常の一齣一齣に全体呈露しているといわなくてはならない。いわば針尾島での碩水の後半生そのものが、「拙賦」の注釈としての意義を担っているといってもよい。

なお、私はかつて濂溪の「拙賦」に闕説して、濂溪の「拙」なる語をもって表現され得る生涯は、巧者の態度をもってしては決して求めることのできない一層高次の価値を、富貴・幸福・快樂などがわれわれの生の価値や自明の目的になっているような滔々たる歴史的現実から隠して純粹に内面に確保した底のものであるだろう、と述べた(『日録』につ



いて(Ⅱ)「一人の史」ということ」。そして、針尾島での碩水の後半生とは、確かにそのようなものであった。

上掲の碩水の詩を読む者は、彼自ら述懐するように、彼の性格の中には剛直で世俗との妥協を厳しく拒否する一面があり、頑なに自己を貫いてゆこうとする狷介さがあることに気付くであろう。そして、このことは彼が朱子・李退溪・山崎闇斎を貫いて嫡々相承してきた正統の保任の自覚と決して無関係ではない。また、碩水にはこの正統(彼の言葉でもって表現すると「斯文一縷の命脈」)を江戸時代産のすべての学派が学派としての首尾一貫性を完全に失って断片的スクラップと化し終わった維新後に伝えるという使命があった。このように、碩水の生には、眼前の歴史的現実を「例外者」としての自覚に生きながら、しかも自らは正統の保任者を自覚するというパラドクシカルな性格を指摘することができるであろう。しかし、われわれは些か性急に結論を求めすぎたようである。再び初めに立返って、結論へと至る過程が順次明らかにされなければならぬ。

六

幕末維新期の朱王学者の書簡集を読む者は、しばしば、「令兄氣象甚好シトか折々風聞いたし申候」(『朱子書』二九三頁、草庵の碩水宛書簡)、あるいは「此人(端山を指す)ハ小子愛日楼ニ而暫時何廉、如来教人品資質大ニ宜敷、佐々よりハ胸宇頗濶大と被存候」(『陽明書』四四八頁、斐山の草庵宛書簡)という、端山の氣象に関説した表現に遭遇するであろう。また、碩水もその「端山先生楠本伯子墓碑」において、兄端山の氣象を「先生天資純粹、渾然として夙成。幼にして威儀端莊、狎弄を喜ばず」(『碩水遺書』七)と形容している。その表現は宛ら宋儒程明道の氣象を髣髴とさせるであろう。それは碩水の「偏狭固滯、執拗好勝」(訥庵が碩水を評した表現)の氣質と極めて対蹠的である。それかあらぬか山田方谷の高弟の三島中洲が、その詩の中で二人を「西海の二程」と称し、兄端山を明道に、弟碩水を伊川に擬しているのも偶然ではない。

宋学を尊崇して精研を極む、一卷の遺書(端山遺書)万世に伝う。西海の二程名負かず、伯は明道の如く叔は伊川。(中洲自筆)

しからば、兄端山に比して、碩水の氣象とはいかなるものであろうか。ひとまず碩水の氣象を示す資料をいくつか示すとしてしよう。

貴契ニ於て一議論不合候とて忽氣を作し怒意を被発候様なる事有之候てハ、乍失敬涵養克治之御功夫乏敷、其極偏狭固滯、執拗好勝之弊ニ結果被成候様之患可有之歟と甚懸念仕候ニ付、一応苦口之義押切て申進候。(中略)過日最後之貴教には頗ル不平之氣動き候ニ相見へ、黒川生へ之御答書ハ怒氣勃々、罵詈之語滿幅相見へ候ハ、如何にも有道者之氣象ニ有之間敷、乍憚反求克治之功を御着被成候てハ如何候半哉。右之体にて御油断御座候ハ、後ニ偏狭固滯、執拗好勝之弊ニ結果可被成歟と甚御案じ申上候。(『朱子書』一九頁、この書簡は、安政六年十月、小塚原の刑場に捨てられた頼三樹三郎の遺屍を訥庵が幕府の忌諱を憚らず収葬した事件について、碩水が批判した書簡に対する訥庵の返書)

乍失敬貴兄と拙生之氣質も亦相反候て、其失を申セバ貴兄ハ急迫苛刻に失し易く、今般之貴教杯も其意ハ忠厚に出て、御論も正敷候得共、辭氣ハ頗過率直候処有之候様相見申候。(同二五頁、この書簡は、一齋没後五ヶ月にもならぬうちに訥庵が河田迪斎の未亡人及び姪女(ともに一齋の女)を伴って猿若町に観劇に行ったことの失を指摘した碩水書簡に対する訥庵の返書)

貴契之講論兎角少々文字間ニテモ少々圭角アリ、過激之弊アリ、平素御講究ノ持敬學問ニ於て如何と存し申候。(同二五八頁、草庵の碩水宛書簡)

扱又反觀内省之工夫ヲ相用候様被仰下、誠以難有敬承仕候。兎角世之相交者警戒之語ニ乏ク、得益候事不多候処、先生えは孚嘉頂門之一針ヲ御下し被下置、別而不堪感佩之至候。後來不相替御鞭策奉願候。孚嘉性質剛偏ニテ、兼々變化之功ヲ不相用候而ハ不相成義とハ奉存候得共、師友之警戒ヲ得不申候へハ、自以為是之氣味有之、終二旧習二汨没仕可申之処、御教誨承り、急度相改可申候。(同一八七頁、碩水の

## 草庵宛書簡

「褊狭固滯、執拗好勝之弊」(訥庵は碩水宛の前者の書簡において、繰り返しこの表現を用いて碩水の気質の弊に対して忠告を怠っていない)、「急迫苛刻」、「圭角アリ、過激之弊アリ」、あるいは「性質剛偏」という、碩水の気象について下された様々な評価は、直接にはひとまず負のそれである。それは例えば「光風霽月」「冰壺秋月」「洒落」「優柔厭厭」「虚心平氣」等々と様々に表現されて、真に悠々たる天地の気象を感ぜしめる完成した人間の境地とは対蹠的なものであり、涵養克治・気質変化の功によって矯正せられなければならない気質上の欠点である。上掲の資料は、ともに碩水にかなり強い偏癖があったことを示している。しかし、われわれは同時にそれが碩水における原理的なるもの(それが何かについては、本稿の叙述それ自身が明らかにする)を堅持するために長所として作用していることを力一杯主張したい。次の碩水の言葉は、宋代儒学思想の原理的なるものを、江戸時代産のすべての学派が学派としての筋道立った秩序性を失って断片的な性格を強めていった明治時代において、依然として維持しようとする不拔の決意が、否定的な言辞をもって表現せられたものと解したいと思う。すなわち、

擬又虚心平氣之御教諭々々被仰示、別而感謝無量。全躰孚嘉之性質柔弱之者二而、此道荷任無覺束奉存候処、後來剛毅質直二而無之候而ハつまり不申と承及、夫より少々豪邁底ニ力ヲ用ヒ、近日ハ又々弊ヲ生シ困リ候事ニ御座候。朋友講習之間、別而指支有之。御諭之虚心平氣、朝夕服膺可仕候。近日之工夫何も無之候得共、存養持敬之一段、以急務之事と相考、朱子敬齋箴ニ力ヲ用ヒ罷在候。夜寐箴も殊之外面白相覚へ申候。(同二二〇頁、碩水の草庵宛書簡)

上の一文は、かかる脈絡の中に置いたとき、始めてその真意を開顯するように思われる。碩水のこの文には、思想(碩水は「此道」と言っているが、ここではひとまずかく改釈する)というものが、それを担う人間(主体)の気質・性格の刻印を受けるということが鋭く洞察されている。碩水が「全躰孚嘉之性質柔弱之者二而、此道荷任無覺束奉存候処、後來剛毅質直二而無之候而ハつまり不申と承及、夫より少々豪邁底ニ力ヲ用

ヒ」と言っているのは、恐らく孔子の高弟の曾參などを念頭に置いて発言しているであろう。朱子はその「大学章句序」において「三千の徒、蓋し其の説を聞かざるは莫く、而して曾氏の伝、独り其の宗を得たり」、すなわち孔子の学、宗統を伝承したのはただ曾參の学派のみであったと述べた。そして、曾參がひとり孔子の学、宗統を継承し得たのは、偏にその風格を「壁立万仞」(朱子の語)とも称せられた彼の剛毅な気象に負っている。曾參の後、子思・孟子がその学(儒学)の宗統をよく継承し得たのも、同様に彼等の剛毅な気象に負うところが大きであった。

只だ曾子の如きは則ち大抵剛毅に偏す。これ終に是れ立脚する処有り。其の他の諸子皆な伝無く、惟だ曾子のみ独り其の伝を得る所以なり。子思に到つても也た恁地く剛毅、孟子も也た恁地く剛毅なり。惟だ是れ這般き人有りて、方に始めて湊合し得著く。惟だ是れ這の剛毅等の人にして、方に始めて立ち得て定まる。(『朱子語類』九十三、賀孫)とあるのがそれである。そして、その剛毅な気象は、例えば程門の謝上蔡の言が端的に物語っているように、外面的な知識、事功を追求するものに對していえば、外から内へ、対象から自己へという思想のある根本的な方向性であった。一言もってこれを蓋えば、人間の心という内面性の重視と一味である。すなわち、

諸子の学、皆な聖人より出ず。其の後愈々遠くして愈々其の真を失う。独り曾子の学、専ら心を内に用う。故に之を伝うるも弊無し。子思・孟子を觀れば見るべきなり。(『論語』一、「吾日三省吾身」集注)とここで、朱子はこのように、曾子・子思・孟子の気象を把り来たつて「剛毅」と形容しているけれど、これは飽くまで個人の性格に属するものである。しかるに、朱子の次の発言は、このように個人の性格に属するものでありながら、同時に彼等の時代の境位に關係していることを指摘している。この洞察は犀利であるといわなくてはならない。

孔門は只だ一箇顔子合下に天資純粹なり。曾子に到つては便ち剛に過ぐ。孟子と相似たり。世衰え道微にして、人欲横流す。是れ剛勁にして脚跟有るの人ならずんば、定立し住まらざらん。(『朱子語類』九十三、淳)

「世衰え道微にして、人欲横流す」というのは、周室の宗主的權威、すなわち周室がその宗教的權威と統制力を全く失つて、礼的秩序は頽廢し、列国の間で攻伐を専らにするに至つた春秋時代後期から戦国時代に至る時代相をかく表現したものである。些か穿つた見方をするならば、孔子後の春秋時代後期から戦国時代という境位が、剛毅な氣質の人間を要求したということが観取し得ないであろうか。これと類比的に表現すれば、江戸時代産のすべての学派が学派としての理論的な首尾一貫性を完全に喪つて断片的スクラップと化し終つた明治以後において、依然として朱子学の正統の保任者であり続けること、あるいは同じことだが「斯文一綫の命脈」を後代に伝承すること、総じて「今の古人」（沢瀉が碩水を形容した表現）であるためには、どれほど「剛毅」な氣質を必要としたかはもはや想像に難くない。

明治時代、わけてもその初期というのは、『方丈記』の作者の表現を借りていえば、「古京はすでに荒れて新都はいまだ成らず」という「間」の時期ではなかつたらうか。わけても、政治・軍事・財政・教育等の制度的機構が整備されて国家の体制が整う以前の明治前期において、このことは最も妥当するのではないだろうか。事実、明治二年四月、天皇の東京滞在中、太政官を東京に移すことを達し、事実上遷都を決して、漸次東京への首都機能の移転が行われたことは、一入「古京はすでに荒れて新都はいまだ成らず」という感慨が深かつたのではないだろうか（むろんかくいつたからといって、江戸は慶長八年（一六〇三）、徳川家康が幕府を開いて以来、わが国の政治的・文化的中心として発展してきた、当時世界的にも有数な大都市であり、『方丈記』の作者のいわゆる「新都」造営途中の福原京とは同日の談ではないことは、承知している。従つて、かかる見方は飽くまで類比的な域を出るものではない）。しかし、このことは単に産業や技術や法律等の制度的機構の側面においてのみいふのではない。むしろ、思想的領域においてこのことは一層端的に妥当するであろう。旧いものは亡びて「既になく」、新しいものは「未だない」二様の「ない」という思想的に空白の時期において、依然として正統の保任者であり続けるということは、曾參のごとき「壁立万仞」なる剛毅の

氣象を不可欠とした。碩水の「士は剛毅の称なり。剛毅ならずんば則ち道に任ずること能わず。道に任ずること能わずんば、則ち士たるに足らず」（『碩水遺書』十二）という文は、端的に彼のかかる自覚を表現したものである。そして、碩水が自己の柔弱な氣質を矯正して豪邁底に力を用いようとしたというのも、実はそういう努力を物語っている。再び繰り返すが、「褊狭固滯、執拗好勝之弊」、「急迫苛刻」、「圭角アリ、過激之弊アリ」、「性質剛偏」等々と、それ自体は碩水の氣象について下された様々な負の評価が、碩水における宋時代儒学の原理的なものを堅持するために長所として作用したことを、力一杯主張したい。碩水の性格について下されたこれらの評価は、彼が二様の「ない」という過渡期の時代において、原理的なものを堅持する不拔な決意が、否定的な言辭を取つて表現せられたものと解することができるであろう。

## 注

(一) なお、講学という点に限っていえば、同じく宋明の性理の学を奉じながら、端山・碩水兄弟とその講友沢瀉との間には、現象的には大きな逕庭があるように思われる。少なくとも沢瀉には楠本兄弟のような伝道者としての熱情は見出し難い。沢瀉は保津沢瀉塾での講学の模様について、碩水宛の書簡でこう述べている。

小生学業も昔時ト少シ違、何学何派ニ不拘、儒仏詩文小説雜家何も研究其旨。但本支輕重之処有權而已。嘗儒仙と申印ヲ製相用ルニ至ル。寔ニ老兄之叱斥ヲ可受。然レドモ非可匿、和盤托出之。（『朱子書』三七二頁）

来学生通学共ニ都合廿余名も有之候得共、出来候人ハ無之、一樣未熟之人而已。旧学之人ハ多岐路ニ躊躇し前途ニ見込覺束なく被考候。就而ハ朱王精微之学杯ハ中々根器ニ合不申、因て略朱子之本註ニテ四書之類著実践履サセント欲スレトモ、是又輕慢心之所能ニ非也。因而更ニ和漢史乘ヲ加へ、東萊之法之如く事迹より義理剔出セントス。却而近して有益乎。今日ニ当り如何心得而可ナラン。御指教承度候。今日又世風一遷之時到、進力退力不審。吾事ニ関サレトモ又

全不実ニモ非。寔斯学用力之地、又得力之地乎。唯与知者可言也。  
(同三四五頁)

このように沢瀉が従来の講学の方針を維持し得ず、路線変更を余儀なくされたことをかこつ背景には、なるほど文明開化の波に洗われて、日本固有の淳風美俗が漸次失われて人心が浮薄になってきたこと、あるいはわが国の近代化に伴って伝統思想を成立させるための前提条件が急速に突き崩されて、在来の諸体系が崩壊して断片的性格を強めていったという歴史的現実が大きく作用していることは否み難い。後者の書簡の末尾には、維新後の激しい変動と波瀾の時期に遭遇して、既に甘んじて退蔵韜晦の途を選びながら、しかも方途に迷って身を処しかねている者の屈折した感慨が吐露されている。それとともに、朱子学者端山・碩水との対蹠性においていえば、沢瀉が陽明学者であるということも、かかる傾向を助長させた一因になっているように思われる。というのは、陽明学は朱子学に比較したとき自由の分が大きく、その開かれた性格の故に、それだけ儒仏道という既存の教学の枠組みを撥無することが容易であったから。沢瀉が「儒仏仙」という印章を用いたということは、このことを物語っている。

(2) 岡直養は碩水の没後、その遺著を衣食の資を節し、慨然として私費を投じて刊行し、その業績を永く後世に伝えるのに与つて力があった人である。彼もまた社会的には決して高位顯職に昇つて時代に時めいた人ではなかったが、次の言は彼の思想的地位の一端を窺うに足るものであろう。

山崎闇齋派の学者は明治大正昭和三代を通じ終戦前後迄三宅尚齋派に属する内田遠湖(周平)岡彪邨(次郎)の両翁が東京に居り講学に著述に又文章に全国崎門学者の代表の觀があつた。兩人共楠本碩水の門人で所謂兄弟弟子の間柄であつた。(梅澤総人氏「田中蛇湖翁」〔稲葉黙齋先生と南総の道学〕所収)

(3) なお、栗水宛の書簡では「平生周家の賦を学ばんと欲す」に作り、文字に若干の異同がある。

(4) 程明道といえは、わずか二十数歳の若さで張横渠の問いに答えて

「定性書」を著わし、完成された人間の境地としての「廓然大公」を説いた人で、人間の功夫について語ることも少なく、むしろ上達のところについて語ることが多かったといわれる。それでは、その氣象が明道に擬せられた端山は、明道のように初めから然く既に完成した人間の境地をそのまま示していたかという点、決してそうではない。次にあげるエピソードは、思うに端山が功夫に努めた人であることを語っている。

今朝暴怒し、遂に一婢を鞭つに至るも、怒猶お止まず。殆ど之を逐わんと欲す。家人交々之が為めに謝して稍々積く。已にして自ら思ふ。此の婢素と罪有り。之を怒るも未だ失と為さず。然りと雖も之を鞭つに至り、復た之を逐わんと欲するは、則ち過激大甚だしく、已に心を動かし氣を暴し了る。(「端山遺書」五)

「暴怒」、すなわち端山が猛烈な怒りに襲われた記述は、彼の語録「習録」を読むと一再に止どまらない。

(5) 明治時代の前半期をこのように「間」の時期、既にあつた様式が亡び、新しい秩序のいまだ形成されない過渡期の過渡性として把らえるという着想を、私は唐木順三氏「中世の文学」(全集第五卷)に負っている。なお、唐木氏が既に指摘しているように、氏自身はその発想のオリジンをハイデッガーのヘルダリン評釈から得ている。しかし、私はここではその着想を十分に展開することができず、精々その指摘に止どまった。

(6) 柔弱の氣質を矯正しようと豪邁底に力を用い、近日はまた弊害を生じて困却しているという碩水の言は、自己反省を通じて鋭くされた、それだけに切羽詰まった切実なものである。草庵は年長者らしく、碩水に対して懇切をさわめた応答をしている。

貴兄下地御柔弱に被思召、因而豪邁底ニ御力ヲ用ヒ被成候処、又一種之病ヲ生シ候様被思召候処、御尤ニ奉存候。自分之弊ハ自療シ候方可然奉存候。且又豪邁底に用力可申と被存候事ナゾ決シテ不可然。見理徹底いたし候ハ、自然持守も堅固、不可犯之氣象ハ自然出来可申事ニ御座候。折角御功夫奉願入候。(「朱子書」二五二頁)

(平成二十年九月三十日受理)